

# 敦煌韻書の發見とその意義

高田時雄

## 1. 切韻・唐韻斷簡の發見

敦煌遺書が世に知られるようになった当初から、『切韻』や『唐韻』の殘卷がそこに含まれていることは報告されていた。おそらく最も早く學界に敦煌遺書の存在を報じた羅振玉『敦煌石室書目及發見之原始』<sup>1</sup>に既に「唐韻 切韻 小板五代刻本均殘」が挙げられ、切韻系韻書の存在が報じられている。内藤湖南も『大阪朝日新聞』に連載した「敦煌石室の發見物」において、羅氏の報道に依據しつつ「右孰れ珍本ならざる無き内唐韻、切韻の五代刻本の如きは刻本は宋代に生まれりとふ學者の定論を顛覆するに足れり」と書いている<sup>2</sup>。もちろん發見者である當のペリオ自身も、莫高窟からフランスのスナール（Émile Senart）に宛てた書簡にその發見を以下の如く書き記していた<sup>3</sup>。

童蒙教本や古典の他には、辭書類も重要です。十世紀の終わりに吐魯番に行った王延徳は、同地の僧侶たちが、藏經、玉篇、切韻、佛經音義を所持していたことを記録しています。敦煌でも同様であったことは明らかです。中國の辭書中最古參の説文は、各文字の發音が、インドの影響による反切法を用い視覺的に表記されるようになってまもなく用いられなくなっていました。この新しい方法は先ず部首排列された顧野王の玉篇に用いられ、次いで韻によって文字を排列した陸法

<sup>1</sup>『東方雜誌』第6卷第10期（1909）また同年刊行の單行本。

<sup>2</sup>『大阪朝日新聞』明治42年（1909）11月24日

<sup>3</sup>1908年3月26日敦煌千佛洞と發信日と發信地を明記したこの手紙は、同年の極東學院紀要に掲載された。P.Pelliot, Une bibliothèque médiévale retrouvée au Kan-sou, *BEFEO*, VIII (1908), p.524.

言の切韻に適用されました。唐代には、孫愐が切韻の改訂を行って唐韻となり、宋代にも何度か修訂が加えられ廣韻となりました。原本玉篇は長く佚書でしたが、二十五年前に日本で発見された残巻によってその構成が明らかとなりました。同時に、これも日本で再発見された版本によって、廣韻の二種の系統本が出版されました。しかし陸法言の切韻と孫愐の唐韻だけはまったく姿を現さなかったのです。ところが此處でわたしはこの二つの辭書のかなりな量にのぼる残片を発見したのです。「孫愐切韻」というような書名もあり問題はややこしくなりますが、これは唐韻の書名を獲得する前に孫愐が切韻を改訂した初稿本を作っていたと考えればいいでしょう。

ペリオは中央アジア探検に出発する直前まで、「古代中國音韻史」の原稿を執筆していただだけあり<sup>4</sup>、切韻唐韻の斷簡発見の意義をかなり詳しく解説している。しかし神田喜一郎の推測するように<sup>5</sup>、この雑誌はかなり遅れて刊行されたものであり、日本や中國の學界では、羅振玉や内藤湖南の報道によって、はじめて敦煌遺書の発見を知ることになったのである。さて羅振玉のいう切韻・唐韻は、五代刻の小本であったということであるが、これは現在のフランス所蔵の編號でいえばどれにあたるものであろうか。フランスには小さな斷片まで含めると現在、寫本刊本併せて22點の切韻系韻書が知られているが<sup>6</sup>、そのどれを指して言っているのであろう。刊本について言えば、P.2014, P.2015, P.4747, P.5531の四種しかなく、その中で書名に見えるものはP.2014のみで、それには「大唐刊謬補缺切韻」とある。又ペリオが「孫愐切韻」と題するもののあることをいうのは、これはP.2016(斷片一葉)が、孫愐の唐韻序を持っていないながら、卷首に「切韻」としていることを指しているものに違いない。これは刊本ではなく、寫本である。ペリオ自身は切韻、唐韻の刊本があるとは言っていない。切韻も唐韻もあり、かつまた寫本以外に刊本がある

<sup>4</sup>“Sur la phonétique du chinois ancien”(inédit). (参照) 高田時雄「ポール・ペリオの『古代中國語音韻攷』手稿について」『日佛東洋學會通信』18(1994), pp.14-15.

<sup>5</sup>神田喜一郎『敦煌學五十年』1960年、東京、二玄社、pp.7-8.

<sup>6</sup>P.2011, P.2014, P.2015, P.2016, P.1017, P.1018, P.2019, P.2129, P.2638, P.2659, P.3693, P.3694, P.3695, P.3696, P.3798, P.3799, P.4746, P.4747, P.4871, P.4879, P.4917, P.5531.

というのを、羅振玉が誤解したためにこの報道となったものであろう。ともあれ、非常に早い時期に敦煌韻書の存在そのものは知られていたのであるが、実際にそれが公開され研究されるまでには実は若干の年月を必要とした。そこへ話を進める前に、清朝における切韻系韻書の流傳状況について瞥見しておくことにしよう。

## 2. 廣韻の時代

明末から清初にかけては、『切韻』『唐韻』はおろか、『廣韻』すら容易には眼にし得ないような、そういう状況であった。明代前半期には、元代を承けて、いわゆる略注本が盛んに刊行されることもあったが、せいぜい正徳年間ぐらいまでで、その後は絶えて出版されることがなかったのである。したがって、康熙六年(1667)に、顧炎武が内府刊本によっていわゆる顧刻本を出版した時には<sup>7</sup>、さすがの顧炎武自身も詳本・略本の區別を知らないような有様であった。顧炎武の弟子潘耒によれば、「我が師顧亭林先生は音韻學に深い知識をもっておられたが、學者が今の状態に馴染んで、昔の實状に通じていないことを残念に思い、始めてこの書(『廣韻』)の價値をたたえ、淮上(淮安)で出版された。しかしその見た明の内府刊本は、すでに刪削を経たものであった。かなり後になってその本の完全でないことを知り、後序を作って遺憾の意を記されたのである」<sup>8</sup>。

潘耒の言うように、顧炎武は後年その過ちを悔い、「廣韻跋」を書き改めたが、その在世中に詳本『廣韻』の眞面目を知ることはなかった。顧炎武が潘耒にあてた書の中に次のような一節があり、その消息を伝える。「讀書しても軽々しい發言をしてはならぬ。著述は必ずや後學を誤るもので、私が廣韻に跋を書いたのがそれだ。青主(傅山(1607-1684))のこと—高田)は讀書四五十年にもなるが、やはり同じ意見である。今、そ

<sup>7</sup>世に顧刻本と稱されるこの本は、もちろん顧炎武が深く關與したに違いないが、實際には張昭(字力臣)による刊行であった。張昭は書に優れ、この『廣韻』や『音學五書』の版下は彼の手になったものと言う。葉德輝『郎園讀書志』卷二「廣韻五卷康熙初元張昭校刻本」。

<sup>8</sup>潘耒「重刊古本廣韻序」『遂初堂文集』卷七、又澤存堂本卷首にも載せる。「先師顧亭林、深明音學、憫學者泥今而昧古實、始表章此書、刻之淮上。然所見乃明内府刊本、已經刪削者。久而覺其書之不完、作後序以志遺憾。」

の跋文を廢棄して別に一篇を作って、わが過ちを書きとどめるので、一覽に供する」<sup>9</sup>。

いま『亭林文集』巻五に収める「書廣韻後」は改作したそれであろう。ただし改作以前の「跋」は筆者の見た顧刻本には載せず、今眼にし得ない。王國維が1920年3月自ら顧刻本を入手した時に書いた「顧刻廣韻跋」に、「この書の陳祺公（すなわち陳上年）序もおそらくは亭林先生の作であろうが、亭林の後序は文集に載せるものよりもずっと簡単なものだから、そちらのほうが定稿で、こちらは初稿である」<sup>10</sup>とあるのを見ると、王國維の入手した本には、改作以前の後序（跋）が附いていたことになる。今それを見る便宜を得ないのはいかにも残念である。

いずれにせよ、大中祥符元年（1008）に陳彭年等の手で編定された『大宋重修廣韻』の姿を伝える詳本は、康熙43年（1704）に張士俊の澤存堂本が、康熙45年（1706）に曹寅（棟亭）による揚州詩局本が相次いで出版されたことによって、ようやく世上に流布することとなる。ただし後者は最後の入聲一卷を略本によって補ったために<sup>11</sup>、統一の取れない不完全な形になっている。したがって後世、澤存堂本系統の諸本が全盛を極めるようになるのは當然であった。

現在では、詳本 略本という改訂の順序は定説となっているが、實はこの問題については近い過去までかなりの議論が存在した。それは『四庫全書總目提要』が、「廣韻」について『廣韻五卷』と『重修廣韻』の二本を出し、前者（すなわち上述の略本）は陳彭年重修以前の舊本であると結論づけたからである。『提要』の論據は、『永樂大典』が前者の本を引くときは「陸法言廣韻」と稱し、重修本を引くときに「宋重修廣韻」と稱していること、また前者が「匡」字など宋諱を缺筆していること、特に重修本では二十一般の韻目を「欣」に改めているのに對し、前者は「殷」のままであることなどであり、それによって、朱彝尊が「重刊廣韻序」で、「明の内庫の刊本は、古本の箋注の字數が不均等なので、（出

<sup>9</sup> 「與潘次耕札」『亭林餘集』（四部叢刊本）「讀書不多輕言、著述必誤後學、吾之跋廣韻是也。雖青主讀書四五十年、亦同此見。今廢之而別作一篇、並送覽以志吾過。」

<sup>10</sup> 『觀堂別集』卷三「此書陳祺公序、疑亦亭林先生作、亭林後序比文集所載者殊略、蓋彼乃定稿、此則初稿也。」

<sup>11</sup> 朴現圭・朴貞玉『廣韻版本考』1986年、台灣、學海出版社、によれば、曹寅本の入聲卷は、略本の注を更に簡略にした「略多本」を用いたものだとする。詳細は同書を参照のこと。

版に携わった)宦官が削ってしまい、字數を平均にした」と書いた<sup>12</sup>、その説を批判し、略本舊本説を打ち出している。『提要』の影響力は巨大であり、これを信ずる人は後世にも少なくなかった<sup>13</sup>

道光二十二年(1842)成書の陳澧『切韻考』は、反切系聯法という斬新な方法によって、切韻系韻書に對する近代的研究の先河を爲した優れた著作であるが、そこでも「切韻は亡びたとはいえ、廣韻の中に存在している」<sup>14</sup>として、『廣韻』の反切を用いている。當時はそれ以前のテキストが無かったわけで、これは如何ともし難い。陳澧が主として依據した「廣韻」は澤存堂本で、さすがに「(紀昀が)略本が先で詳本が後だ」というのは不確かである。詳本を用いて略本を校訂してみると、刪削の痕跡は至るところにあり、これは辨ぜずとも明かである」と正確な判断を下している<sup>15</sup>。如上のごとく、清代、『廣韻』ひいては切韻系韻書一般をめぐる見解は一般的にかなり混亂したもので、陸法言の原本「切韻」や孫愐「唐韻」など切韻系韻書の本來の面目を窺い知るためのテキストの出現が痛切に待望されていたということが言える。そういう時期に敦煌本が出現したわけであるから、その學界に與えた衝撃の大きさは想像に餘りある。

### 3. 切韻系韻書の研究

したがって、敦煌遺書中に『切韻』や『唐韻』の殘卷が含まれていたことは、非常に注目されたのであるが、実際にはすぐさまその研究に手が付けられた譯ではなかった。その存在は分かっているにもかかわらず、實物に接することが出来なかったからである。敦煌本の「切韻」がはじめて學界に提

<sup>12</sup>澤存堂本の卷首に載せる。また『曝書亭集』卷三十四。「明内庫鏤板、緣古本箋注多寡不齊、中涓取而刪之、略均其字數。」

<sup>13</sup>上掲葉德輝『郎園讀書志』「廣韻五卷」に、紀昀の説に言及しつつ、「この本(略本)が唐韻の舊であると謂っているわけで、孫氏(孫星衍)の説と一致する。これは確實な根據もあり信じてよい」という。つまり葉德輝は『提要』と同じく略本が古いと考えていたわけである。

<sup>14</sup>「切韻雖亡而存於廣韻」(『切韻考』序)。

<sup>15</sup>「謂略本在前、詳本在後、則未確也。以詳本校略本、其刪削之跡觸目皆是、可不辨而自明矣」(『切韻考』卷六「通論」)。ちなみに岡井愷吾「四庫全書總目の廣韻の提要つきて」『支那學』第3卷第12號(1925)は、『提要』の誤りを理路整然と正し、さらに澤存堂本や古逸叢書本の誤りにも觸れる點で、この問題については一讀の價値がある。

供されたのは、ペリオが送って寄こした寫眞が羅振玉の手を経て王國維に渡し、王國維がそれを手寫し、石印に付して刊行したことによってである。時に1921年のことであり、羅振玉による最初の報道から既に12年を経ている。敦煌學初期における寫本の流通がいかに緩慢且つ困難であったかを思い知らされる事實である。初その『唐寫本切韻殘卷』の跋には以下のようにある。

光緒戊午の年(1908)わたしは京師(北京)でフランスのペリオ教授に會い、ペ氏が得た敦煌古書の中に五代刻本の切韻があることを知った。次いでイギリスのスタイン博士の得たものは更に善いものであるということを聞いたが、唐寫本があるかどうかは分からなかった。辛壬(1911-12)以降、ペ君が送ってこられる寫しや寫眞にもこの書はなかった。戊己(1918-19)になって上虞の羅叔言參事とわたしは前後してペ君に手紙をおくり、この書の景照本を求めたところ、今年の秋になってペ君が天津の羅君に送って寄こした。羅君は職人の手で精巧に印刷させ石室佚書中に入れようとしたが、職人が得難く資金も容易に集まらないので、わたしがこの本を手寫して取りあえず刊行することとした。原本の書跡は非常にいい加減で間違いがたいへん多いが、今はそのままとした。誤った箇所は、世の些かでも古書を讀むものならば、まず正すことが出来ようが、その善い箇所になると後の人間が幾ら考えても及ばないものだ。<sup>16</sup>

この石印本には、王國維が寫眞から移録する際の誤りも若干含まれているが<sup>17</sup>、敦煌本切韻を最初に世に紹介した功績はすこぶる大きい。後『十韻彙編』に「切一」「切二」「切三」として収録されるものは、實に王國維のこの本にそのまま據っている。ちなみに「切一」「切二」「切三」

<sup>16</sup> 「光緒戊申、余晤法國伯希和教授於京師、始伯君所得敦煌古書中有五代刻本切韻、嗣聞英國斯坦因博士所得者、更爲完善、尚未知有唐寫本也。辛壬以還、伯君所寄諸書寫照本亦無此書、戊己聞上虞羅叔言參事與余、先後遺書伯君索此書景照本、今歲秋伯君乃寄羅君於天津、羅君擬付工精印入石室佚書中、以選工集資之不易、余乃手寫此本、先以行世、原本書跡、頗草々、訛奪甚多、今悉仍其舊、蓋其誤處世之稍讀古書者、類能正之、至其佳處、後人百思不能到也。」

<sup>17</sup> 上田正『切韻殘卷諸本補正』(東京大學東洋文化研究所附屬東洋學文獻センター叢刊第19輯)、1973年、p.44ff.

は、それぞれ S.2683、S.2055、S.2071 というロンドン所蔵の殘卷に當たるが、王氏の同書跋には巴黎國民圖書館藏と誤って記している。ペリオが送って寄こしたものであり、同氏所獲のものと誤解するのは止むを得ないとして、なによりも草創期敦煌學における情報の混亂をよく示している<sup>18</sup>。

王國維はそれ以前すでに 1917 年の夏、一連の切韻系韻書に関する論考を書き上げ、『學術叢編』第 19 冊に發表していた。それは總題を「唐韻別考」といい、「陸法言切韻」「唐諸家切韻」「蔣氏所藏唐韻殘本」「唐人韻書部次」「唐韻諸本部次先後考」「陸韻唐韻廣韻字數比較表」からなっている。また同年、「陸法言切韻之斷片」「魏鶴山唐韻後序」「小徐說文解字篆韻譜原本」「古文四聲韻所用唐切韻」「唐韻多別本」「唐人韻書」「李舟切韻」「天寶韻英、陳廷堅韻英、張戢考聲切韻、武玄之韻註」を同じく『學術叢編』第 22 冊に陸續發表した<sup>19</sup>。したがって王國維自身が最も韻學に心を寄せていた頃には蔣斧本唐韻及び大谷隊の將來した吐魯番出土の切韻殘卷以外には、敦煌本を眼にしておらず、それでこそペリオに手紙を認め、熱心に寫眞を要求したものとされる。しかしペリオは自身の得た本を送って寄こさず、スタイン所獲の寫眞を寄こしたのである。このあたりの機微は想像を逞しくするしかないが、先にも觸れたように、韻學はペリオ自身が非常に執着した分野でもあり、そのあたりが關係していると考えられることはあながち見當はずれではないと思われる<sup>20</sup>。

王國維よりも早く新發見の切韻系韻書に着目していた學者がいた。日本の岡井慎吾である。我々はやはりその仕事について若干言及しておく

<sup>18</sup>この誤解は後世まで踏襲され、1935 年の『十韻彙編』をはじめ、1973 年に出た李永富『切韻輯附』（台灣、藝文印書館）でさえ、この誤りを踏襲している。

<sup>19</sup>これらの論考は、1921 年『觀堂集林』に収録するに際して、かなり大幅な改題・修訂が行われた。王國維の著作の編年については、洪國樞『王國維著述編年提要』1989 年、台灣、大安出版社、周一平・沈茶英『中西文化交匯與王國維學術成就』1999 年、上海、學林出版社、等による。これらの書の存在は、同僚井波陵一氏の教示によった。ここに記して感謝する。

<sup>20</sup>姜亮夫『瀛涯敦煌韻書卷子考釋』1990 年、浙江古籍出版社、の後記に「近三十年來、時時于上海小店、荒灘得殘絹片紙、細審之大體皆爲伯氏將去者、可能爲伯氏初印貽羅、王諸先生之者、遂爲補遺、因亦附入本冊」とあるが、恐らく誤りである。ここで問題になっている寫眞は、P.2015 の一部であるが、羅・王兩氏が早い時期にこれを入手していたとすれば、『切韻殘卷三種』と同様に何らかの形で公刊しなかったとは考えにくい。これらの寫眞は『十韻彙編』（1935）に「刊」として収録されているものであり、たぶんこの書の出版と相前後する時期に出回ったものと考えられる。

べきであろう。岡井は、早くも 1911 年に蔣斧本唐寫唐韻殘卷<sup>21</sup>を扱った論考「唐寫本唐韻につきて」を『藝文』誌上に發表し<sup>22</sup>、また 1916 年には「西域考古圖譜なる唐鈔唐韻につきて」を公刊した。これらは敦煌本韻書の研究ではないが、切韻系韻書唐寫本の研究として敦煌本と深い関係を有する研究である。これらの著作年代はともに王國維の「唐韻別考」より早いもので、研究史上に特筆すべき事実である。岡井はその後「王氏刊本切韻について」<sup>23</sup>、「刊謬補缺切韻につきて」<sup>24</sup>、「再び刊謬補缺切韻につきて」<sup>25</sup>、「重修廣韻以前の廣韻」<sup>26</sup>、「重松教授將來の切韻及び玉篇の寫眞について」<sup>27</sup>を書き、着實な成果を収めた<sup>28</sup>。

敦煌本韻書の公刊は、王國維『切韻殘卷三種』の後にも、次第にその数を増していった。1920 年からパリに遊學し、言語學・音聲學を研究する傍ら敦煌寫本を調査した劉復は、歸國後、『敦煌掇瑣』（1925 年、中央研究院歷史語言研究所）を出版し、その中に P.2011（「王一」）を収録した。しかし一時期を劃したのは何といても劉復・羅常培・魏建功『十韻彙編』（1935 年、北京大學）の出版で、そこには王國維が出版した三種の切韻寫本、ドイツ隊のもたらした吐魯番發見切韻の斷片二葉<sup>29</sup>、『西域考古圖譜』所收のやはり吐魯番發見切韻斷片、上述『敦煌掇瑣』所收の王仁昫、早くに知られていた蔣斧本唐韻、パリ國立圖書館所藏の五代刻本を、澤存堂本『廣韻』と階段状に排列し、比較を一目瞭然たらしめたものである。もちろん多くが移録本に據っているために、誤寫の混入は否定しがたいが、當時としては極めて便利な工具書であり、その影響力は大きなものがあつた。魏建功『十韻彙編資料補竝釋』（「國立北京大學五十週年紀年論文集學院第十五種」、1948 年、北京大學出版部）はそれを新資

<sup>21</sup>光緒三十四年（1908）上海國粹學報社刊。

<sup>22</sup>『藝文』第 2 年第 10 號、またその補説が「再び唐寫本唐韻につきて」と題して、『藝文』第 3 年第 6 號（1912）に載っている。

<sup>23</sup>『藝文』第 15 年第 12 號（1924）

<sup>24</sup>『立命館文學』第 3 卷第 1 號（1936）。

<sup>25</sup>『立命館文學』第 3 卷第 7 號（1936）。

<sup>26</sup>『服部先生古稀祝賀記念論文集』東京、富山房（1936）。

<sup>27</sup>『斯文』第 19 卷第 9 號（1937）。

<sup>28</sup>岡井は昭和 10 年（1935）11 月に自訂文集『柿堂存稿』を刊行したが、その中にそれ以前の執筆に係るものをほぼ収録している。

<sup>29</sup>ベルリンの編號は TIVK75-100a, TIVK75-100b に當たる。當時北京に留學中であった小川環樹の紹介で東北大學の武内義雄が送付した寫眞に基づき収録したもの。武内義雄「唐鈔本韻書と印本切韻との斷片」、東北大學『文化』第 2 卷第 7 號（1935）。

料によって補訂し、解説を加えたもので、翔實な研究であるが、出版時期が悪いこともあり、流通すこぶる稀で、利用者が少ないのは惜まれる。戦後には、姜亮夫『瀛涯敦煌韻輯』（1955年、上海出版公司）の大冊や、それを補訂した潘重規『瀛涯敦煌韻輯新編』（1972年、香港新亞研究所）同『別録』（1973年、香港新亞研究所）が出版され、いよいよ豊富な材料が、正確に提供されるようになる。周祖謨『唐五代韻書集存』（1983年、北京、中華書局）は出来る限り寫眞によって原姿が窺えるようにし、さらに詳しい考釋を加えたもので、本来ならスタンダード・ワークになり得るものであろうが、惜しむらくは用いられた寫眞が著しく鮮明さを缺く。出版年代は比較的新しいが、仕事そのものが1945年に始められたものと序文にあり、資料も古いものをそのまま用いたために、この結果となった。饒宗頤編『敦煌書法叢刊』（1984年、東京、二玄社）の第二卷「韻書」には、P.2011とP.2014の鮮明な寫眞を載せるが、せいぜいこの程度の鮮明度がなければ、精緻な研究には役に立たないであろう。その意味では上田正『切韻殘卷諸本補正』（1973）における精密きわまりない仕事が高く評價される。この書は主として『十韻彙編』や『瀛涯敦煌韻輯』などの録文を、逐一寫眞によって訂正しており、これらの書を利用する際には缺かせないものとなっている<sup>30</sup>。

敦煌寫本以外では、1925年に故宮本『刊謬補缺切韻』（いわゆる項跋本、また『十韻彙編』に従えば「王二」）、の唐蘭筆寫本が羅振玉によって公刊され、またかなり後の1947年に故宮博物院から影印本が出版された『全本王仁昫刊謬補缺切韻』（いわゆる宋跋本、また「王三」）がある。とりわけ後者は現存する「切韻」諸本のなかで唯一の首尾完備したテキストであり、その重要性は計り知れないものがある。

#### 4. 敦煌寫本から見た韻書の變容

『廣韻』の卷首、大中祥符元年の牒に續けて、陸法言以來「切韻」を増補した人々の名を列擧してあるが、そこには長孫訥言箋注以下、郭知玄、關亮、薛岫、王仁昫、祝尚丘、孫愐、嚴實文、裴務齊、陳道固がそれぞれ

<sup>30</sup> 上田にはまた潘重規『瀛涯敦煌韻輯新編』に対しても鋭い批判がある。同書書評、『東方學』第47輯（1974）pp.139ff.

れ増加字をおこなったとして見える。また『日本國見在書目録』には、上記以外にも、釋弘演、麻杲、孫伯、王在<sup>註</sup>、沙門清徹、盧自始、蔣魴、韓知十の各家切韻が挙げられている<sup>31</sup>。そのほかにも各書に見える切韻は数多い。長孫訥言箋注の儀鳳2年(677)、孫愐唐韻の天寶10載(751)成書は序文によって明かである<sup>32</sup>。ほかには王仁响切韻が、唐蘭の考證によって、中宗時期706-710年にかけての著作と考定されているほか、『三僧記』<sup>33</sup>の記述から多くの「切韻」の成書年代を知り得る。それは同書に見える以下の記事である<sup>34</sup>。

#### 入東宮切韻十三家

陸法言 隋仁壽元年 郭知玄 尺氏 長孫訥言 唐儀鳳二年 韓知十  
武玄之 薛响 麻杲 唐神龍元年 王仁响 祝尚丘 唐天寶八載 孫  
愐 唐開元廿一年 孫伯 唐開元 沙門清徹 唐天寶元年

#### 不入

王存又 唐貞元十七年 蔣魴 唐元和十三年八月十二日 盧自始 未見可尋

いずれにせよ、唐一代の「切韻」諸本はすこぶる多種のものがあつたことを知り得るわけで、敦煌の切韻系韻書がはたしてそのどれに当たるとかということになると、實はほとんど手がかりがない。はっきりと書名が書かれてある場合、例えば P.2011 のように「王仁响刊謬補缺切韻卷三、朝議郎行衢州新安縣尉王仁响字德温新撰定」などとあつたりすれば事は明白である。また他書に書名を出して引かれた注文を、敦煌韻書と比較してみるという方法もあるが、確實に當該の本のみに出る注文だと

<sup>31</sup>各家皆五卷であるが、釋弘演のものだけは十巻となっている。

<sup>32</sup>ただし孫愐の序文には、開元21年(733)とするものもあり、この成書年はまた『三僧記』にいうところと一致するので、孫愐には、新舊二種あつたとしなくてはならない。

<sup>33</sup>『三僧記』は、京都仁和寺の僧禪覺(1174-1220)の著で、もと『禪覺雜要秘鈔』『禪覺記』『禪覺抄』などと稱した。『三僧記』『三僧記類聚』の名稱は後人によるものという。禪覺による書物や記録文書からの抄録、師友の談話や自身の見聞を筆録したものなどからなる。竹居明男『『三僧記類聚』と禪覺僧都』、古藤眞平「仁和寺本『三僧記類聚』の卷次構成」(ともに『仁和寺研究』第1輯、1999年、京都、古代學協會、に収録)を参照。ここに引く「入東宮切韻十三家」の記事は直後に「已上以或人本書寫之」とあり、禪覺が某氏の本から筆録したものであることが知られる。

<sup>34</sup>川瀬一馬「東宮切韻について」、東京文理科大學『國語』復刊第1巻第1號(1951)、後『古辭書の研究』1955年、東京、大日本雄辯會講談社、pp.55-59に収録。今、引用は後者によるが、王仁响を王仁响とし、王存又を王存又とするなどの明らかな誤りは訂正した。またこれに依據する上田正『切韻逸文の研究』1981年、東京、汲古書院、pp.509-510も参照。

決定できなければ、これもなかなか容易ではない<sup>35</sup>。

切韻系韻書は、極めて長い時期に渡って中國の詩文の規範を形作ってきた存在であり、その變遷を見極めることは、中國文化史上の一大課題であるといえよう。長い間『廣韻』という宋代の増補改訂版を通じて窺うしかなかった原本切韻の姿が、敦煌寫本によって具體相を現したことの意義は大きい。先人の努力により、これらの斷片の考證は着實に整理検討され、切韻系韻書の發展を考察する重要な資料として位置づけられている。韻目の數の變遷、獨用・通用など韻相互間の關係、韻目の自序などの問題は、音韻の實體というよりもむしろ、制度にかかわる部分のほうが大きいかも知れない。しかしそれはまた音韻變化の考察に重要な間接的情報を與えるものである。さらに筆者は、斷片とはいえ多種多様な敦煌韻書が發見されたことは、韻書というものの社會的展開を考える上で非常に重要であると考え。安祿山の亂後、中國は貴族的な中世社會からやがて近世的な變容を遂げていくことになるが、それにとまって識字層の擴大がもたらされ、韻書という存在も否應なくその影響を受けることになるわけである。單に押韻の規範を示すという當初の役割を離れて、注文に雑多な日用知識を持ち込み、擴大する識字層の利用に供されるようになる。印本韻書は當然ながらもっとも商業的指向の強いものであるから、そこにこの動向が反映されるのも理解しやすい。曆注にしばしば用いられる五姓の注記が、敦煌本の印本「切韻」(P.2014, P.2015, P.5531) 中に見えることは、その一つの現れである<sup>36</sup>。

敦煌遺書中からはまた『俗務要名林』や『字寶碎金』といった、もっぱら日常の生活語彙や俗語を載録する辭書が發見されているが、こういった辭書の需要が生じてきた事實と、韻書の増補改訂とは、歴史の大きな流れの中では共通の背景をもっているのである。切韻系韻書についていえば、陸法言切韻の原姿を追求するということよりも、むしろこの點にこそ敦煌韻書の發見の意義があったという見方もまた可能である。

<sup>35</sup> 上掲の上田正『切韻逸文の研究』は逸文を操作する際の基礎的參考書として、有用である。

<sup>36</sup> 高田時雄「五姓を説く敦煌資料」『國立民族學博物館研究報告別冊』14 號(1991) p.256ff.

## 5. 全本王韻の發見と敦煌本

殘卷や斷片からでは、反切や注文、さらに韻の排列順などを考えることで、せいぜいが各韻書の同定、また韻書間の先後關係などを論ずること、さらには一步を進めて陸法言原本の姿を想見することが關の山である。もちろんこの種の新たな知見は、清朝期に行われた議論からすれば格段の進歩と言うことが出来、敦煌韻書出現の極めて大きな貢獻であった。しかしたとえば陳澧『切韻考』が廣韻の反切を用いて行ったような系聯法による音韻史的研究は、いかなるテキストであれ完本を得て始めて可能なことであった。その意味で、故宮本全本王韻(「王三」)の發見は畫期的だったのである。現在、切韻音を研究する際の基礎としては、主としてこのテキストが用いられる。この本の反切に對して系聯法を適用した結果は、陳澧の場合と大幅な違いが出るわけではないが、しかし『廣韻』反切では崇母(\*dʒ-)と一類になってしまう俟母(\*ʒ-)の獨立が新たに見いだされるといった、重要な新展開もあった。この獨立はまた「切三」の反切においても見られるもので、切韻音で本來この區別があったものと考えられる<sup>37</sup>。

さて故宮の全本王韻は、よく知られるように龍鱗装という珍しい仕立てになっている<sup>38</sup>。それは二紙をつなぎ合わせて少々長い料紙とし、その両面に書寫する。右から書いていって、終わりまで来ると裏返してまた右から書く。右端に糊付けをして最終葉から少しずつ右にずらしながら臺紙に貼り込んでいく。臺紙が縹ともなり、全體を巻き込んで卷子として保存する。用いるときには卷子を開き、一葉(二紙)ごとに頁をめくるようにすればよい。また第一葉のみは表面には何も字を書かず、裏面から書き始める。

このスタイルは唐代あるいはそれ以降、少なくとも韻書には非常によく用いられた装本で、敦煌韻書の多くも實はこのスタイルであったと思われる<sup>39</sup>。すわなち(一)二紙を貼り繼いで一葉とし、表・裏に書寫す

<sup>37</sup> 李榮『切韻音系』1956年、科學出版社、pp.92-93.

<sup>38</sup> また旋風葉、旋風装とも呼ばれた。李致忠「古書“旋風裝”考辨」『文物』1981年第2期、pp.75-78。また同『中國古代書籍史』1985年、文物出版社、p.161ff.

<sup>39</sup> Jean-Pierre Drège, *Les accordéons de Dunhuang, Contributions aux études de Touen-houang*, vol. III, 1984, EFEO, Paris, pp.196-98 は敦煌本切韻 P.2011 を引いて李致忠説を補完する。また Drège 氏は P.tib.1257 も同じ旋風葉になっていることを指摘する。(この

ること。(二)各葉を少しずつずらして貼り込み、全體を巻き込んで見かけ上は卷子に仕立てる。敦煌韻書は、よく調べてみると、多くが前者の特徴を備えていることがわかる。後者の點については、バラバラになってしまった現在では、はっきりと證據だてる材料はないが、長い紙をそのままに積み上げておくわけにもいくまいから、やはり卷子の形に巻いて保存したものであろう。何よりも前者の特徴を備えているものとすれば、全本王韻の例からして同様であったと見るのが自然である。



圖版 1: P.3693 表

いま P.3693 を取り上げてみよう。これは [圖版 1] のような斷簡である。表裏に書寫され、表面は上聲廿五銑韻の後半から卅三馬韻の文字までが見取れ、背面は卅六蕩韻の文字から始めて、四十九謙韻の文字までが見える(圖版は表面のみ)。表面左端と背面右端の缺損部分に卅三感、卅四敢、卅五養韻の文字が書かれていたはずで、表面が終わると頁をめくるようにして背面に繋げたのである。また表面の左から三分の一ほどの箇所紙の継ぎ目(紙縫)が見える(矢印部分)。つまり二紙を貼り縫いで一葉とした形式が明かである。

また [圖版 2] は P.2016 で、ほぼ中央に「切韻平聲第一」の卷題が見えるが、その前に孫愐の天寶十載の序の最後の部分が書かれている。した

テキストは『瑜伽師地論』から漢譯佛教語彙を抜き出し、それに対応するチベット譯を當てたもの。李方桂に次の研究がある。A Sino-Tibetan Glossary from Tun-huang, *T'oung Pao*, vol.XLIX, 1962, pp.233-356.) また管見では他に、P.2490「歩水畦解」、P.2615「帝推五姓陰陽等宅圖經他」なども同様で、この装本は必ずしも韻書に限られなかったことがわかる。



圖版 2: P.2016 表

がってこれはほぼ巻頭部分と考えてよい。左端は一東の籠小韻の文字で終わり、以下が斷裂している<sup>40</sup>。圖版には示さなかったが、表面のちょうど右半分の背面に貼りつけられた紙片は、公字の注文からはじまり、以下蒙小韻の茅字で終わっている。小韻の排列が他の切韻諸本と異なるが、文字数を勘案すると、もと二紙を貼り繼いで一葉にしてあったものの左側の一紙であることが判明する。すると唐韻序の前に切韻の陸法言序や長孫訥言序があったものとして計算すると、ほぼ一紙分が満たされることになり、これもやはり二紙を貼り繼いで一葉に仕立ててあったものと推測される。さらにその一葉はまたこの韻書の最初の一葉でもあった。

元の王惲(1227-1304)『玉堂嘉話』に以下の記述がある。至元13年(1276)、南宋の行在臨安が陥落し、そこにあった圖書禮器を大都に運んだ時、王惲もそれを許されて見ることを得た。これはその目睹書畫二百餘點中の一である<sup>41</sup>。

吳彩鸞筆、龍鱗裝仕立ての楷韻(楷書で書かれた韻書)。卷末に、柳誠懸(柳公權、778-865)の題記がある。「吳彩鸞は世に仙人であったと伝えられている。一晚に廣韻を一部ずつ書寫しては市に賣りに出したが、人はその意を測りかねたという。この話はよく聞いていたが、なかなかその書を見ることが出来ずにいたのを、何年か懸命に探した結果ようやくこの書を得た。迫力に満ちた雄渾な筆力がごく自然に表現されているのを見ると、古今の學者の及ぶところではない。時に泰和(即ち太和)九年(835)九月十五日、その冊に題する。全部で五十四葉あり、それを鱗のように積み重ね、みな紙縫を留めている。天寶八載(749)に作られたものである。」

饒宗頤の『敦煌書法叢刊』の解説では、上の文獻も引用しながら、P.2011が旋風装であったとして、前後の表紙をつなげた帖装(つまりこ

<sup>40</sup>この部分には実はP.1014(1)の斷片が接續する。その斷片には「二版」とあり、印本韻書を寫したものと思われる。また小韻の排列の順序もP.1014と一致することから、この二者は一つのものであると考えてよい。上田正『切韻殘卷諸本補正』pp.31-32を見よ。

<sup>41</sup>『秋澗先生大全集』卷九十四(「玉堂嘉話」卷二)「吳彩鸞龍鱗楷韻。後柳誠懸題云、「吳彩鸞世傳謫仙也。一夕書廣韻一部、即鬻于市、人不測其意。稔聞此說、罕見其書、數載勤求、方獲斯本。觀其神全氣古、筆力遒勁、出於自然、非古今學人可及也。時泰和九年九月十五日、題其冊。共五十四葉、鱗次相積、皆留紙縫、天寶八載製。」」

れまで普通に考えられてきた旋風装)の圖を示している<sup>42</sup>。この従來の旋風装と稱するものは龍鱗装の形式とはまったく異なるもので、故宮全本王韻の形式を知るものであれば、『玉堂嘉話』の説く様式がすなわち龍鱗装のことを言っているものだと言いきり易に氣づくはずである。しかし龍鱗装については、李致忠が故宮全本王韻の形式を論じて以來ようやく注意し始めたような有様であるから、これは止むを得ないとすべきであろう。

この形式は、諸書に言及される記事から、吳彩鸞が小楷で書寫した韻書に特有のものと思われがちであるが、決してそうではない。敦煌韻書の殘卷や斷片を詳しく見れば、非常に多くの韻書がこの體裁を持っていたことが判明する。さらには韻書のみならず、占書などにも時に用いられていることは注目される。しばしば翻閱の必要があるものは、その便宜のために卷子ではなくこの形式を採用したのである。龍鱗装が中國の書籍形態史の大きな流れから見れば過渡的な存在でしかないことは明瞭である。しかしこの形式が、こと韻書に關して言えば、決して孤立したもので、特殊なものでもなかったことを證明してくれる點でも、敦煌寫本の存在は重要である。

---

<sup>42</sup>同書解説、p.54.